車地蔵

ナレーター　この話は茅ヶ崎市本村前の田に住む、百姓家の娘が恋する男に裏切られ、思いつめた揚げ句のはて、男の家に放火し、その罪で処刑された哀れな娘心を描いたものです。

　昔、むかーし、前の田に貧しい百姓家がありました。おいねという男まさりの娘が、病弱の両親と幼い弟太郎を抱えて、一家の暮らしをたてていました。もとはひとかどの百姓でしたが、両親が病気がちになってからは、おいね一人の細腕では、どんなに働いても暮らしは大変です。田畑はだんだん人手に渡るようになってしまいました。

ちゃん　「ちゃんが不甲斐ねえばかりに……済まねえなぁ、済まねえなあ、おいね。」

おっ母　「せめて、おらだけでも丈夫なら……もう少し何とかなぁ……着物の一枚でも縫って……、かんべんなぁ、おいねゆるしてけえな。」

ナレーター　けなげな娘を前に、出るのは愚痴ばかり。しかしおいねはくじけません。くじけないばかりか、ちゃんやおっ母を明るく励ますように、いつも言うのでした。

おいね　「今にちゃんや、おっ母が丈夫になって、太郎も大きくなれば、きっと盛りけえせるわ。」

ナレーター　おいねは娘盛りを、なりふりかまわず、将来に希望をふくらませて一生懸命働きました。村の人達もまた、おいねに親切でした。

　前の田は坂道が多かったので、おいねが荷車を曳いて坂道で困っていると、村人は畑から上がってきて、

村人1　「おいね坊、きょうはまた、たんと荷をつけたもんだなぁ。」

おいね　「雨が降りそうだんべえ、折角、乾かしたもんでなぁ。」

村人2　「そりゃあそうだ、今押してやんからがんばれよう。」

おいね　「わりいなぁ、仕事してんのによう。」

村人1　「それっ、ちゃんと梶棒おせえろう。」

村人2　「いいかっ、それっ。」

村人123　「よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ。」

おいね　「ふう～ふう～　ふう。」

村人3　「いまちっとだ、がんばれ、がんばれーそうれ上がったぞう。」

おいね　「ふう～　ああ、おしい、おばあ、いつもいつもありがとう。」

ナレーター　このようなことは、しょっちゅうで、殊に農繁期には村中が手伝いました。おいねは村人の温かい心に涙を流して、

おいね　「おらがも早く立ち直って、ご恩げえしをしなくちゃあ。」

ナレーター　と、片時も感謝の気持ちを忘れませんでした。おいねは男勝りの上に器量よしで、気立ても良かったので、若者たちの憧れの的になり、近郷近在から倅の嫁にと、ひくてあまたでした。けれど、おいねはそうしたことに、一向無頓着のようでした。それは隣村の弥助という大百姓の家の息子と、村の祭りに、ふと知り合ってから、人目を忍んで逢う仲だったのです。この弥助との逢瀬は朝から晩まで働く他潤いとてないおいねには唯一のやすらぎであり、働く気持ちをかきたててくれる明るい光そのものでした。

月日は流れて、ある日、おいねは体の変調に気づきました。

次の弥助との逢瀬に、

おいね　「弥助さん産婆さんに診てもらったの……。」

ナレーター　身ごもったことを打ち明けました。

弥助　「えっ……そ、そりゃあほんとうかよう。」

おいね　「だからさあ、早く祝言をあげようよ。」

弥助　「うーん……そいつはぁ困った。」

おいね　「えっー。弥助さん、いま何ていった。」

弥助　「弱ったことになった。　こりゃあいけねえや。」

おいね　「どうして、どうしてさあ。」

弥助　「そりゃおめえ……。」

おいね　「なにがだめなのよう。」

ナレーター　思いがけない弥助のうろたえ振りに、おいねはハッと胸をつかれました。それ以来、弥助からは何の音沙汰もなくなりました。利発なおいねは、不吉な予感に心がうずき始めました。いろいろ思案の末、弥助の両親にあって祝言のことを頼みました。が、両親は剣もほろろです。

弥助の父親　「おいねさんや、そんな言いがかりをつけられちゃ困んなあ、弥助にゃあ、とっくに足入れを済ませた娘がいるんだ。近々祝言をあげることになってんだよ。」

おいね　「そんなぁ～あてえは一度もそんなことは聞いてねえだ。」

弥助の父親　「強情だなぁ、おまえさんも。うそだと思うなら近所で聞いてみなよう。」

ナレーター　余りの事に、おいねは体中からいっぺんに力が抜けて、呆然となってしまいました。それからのおいねは、悔しさと弥助一家に対する憎しみが、日増しに嵩じていきました。

ある夜、弥助の家から火の手が上がりました。

その紅蓮の炎に写し出されたのは、裏切られた男へ復讐の鬼と化したおいねの夜叉とも言うべき姿でした。

おいね　「火を付けたのは、あていだぁー恨み思い知ったかぁ。」

ナレーター　わめきながらおいねは火の中へ飛び込みました。が、かけつけた村人がとっ

さに、おいねの襟髪を力いっぱいつかんでしまいました。

おいね　「放してえー放してよう。」
村人1　「これー、おいね待て！」
村人2　「ばか、ばか、しずまれよう。」
おいね　「放してえ、おねがいだぁ、放してえー。」
村人3　「だめだめえ、死んじゃあなんねえ。」
村人123　「しっかりつかめえてろ。でえじょうぶか、でえじょうぶだ。」
おいね　「放して、放して、お願いだー。」

ナレーター　おいねは村人によって助けられました。だがその後、放火の罪で隣村・菱沼の死置き場で処刑されてしまいました。
そして、両親と弟の太郎はいつか村から姿を消してしまいました。
それからと言うもの、おいねの耕していた田畑から、夜な夜な、おいねが曳いていた荷車の音とそっくりのギイッ、ギイッ、ギギイ、ギイッと言う不気味な音がして、村中を震え上がらせました。そして、このあたりでは、作物が実らなくなり、身ごもっても流産するとか、奇妙なことばかり起こりました。

村人1　「こりゃあ、おいねの魂が祟ってんじゃあねえのか。」
村人2　「かえええそうなことをしたよなあ、あんないい娘をよう。」

ナレーター　村人は今更のようにおいねが不憫になり、おいねの畑へお地蔵さんを立てて冥福を祈りました。このお地蔵さんは「車地蔵」と呼ばれるようになりました。
その後、間もなく弥助は家を出て消息を絶ちました。ある山寺に、出家姿の弥助を見かけたという人もいます。
村人たちの間で、いつしか弥助のことが噂になるようになりました。

村人1　「あれも可哀相な男だよ。」
村人3　「結ばれねえ二人だったけんど…、弥助は、心底おいねに惚れてたんだよなあ。」

ナレーター　おいねを捨てたものの弥助の善良で気の弱い事は、誰もが知っていたのです。やがて村の人たちはむつまじい二人の姿を心に描きました。蓮の花がいっぱい咲いているあの世で……。

おいね　「弥助さん、早く早く。」
弥助　「待て待て、アーおいねは早ええなあ。」
おいね　「弥助さん、こっち、こっち。」
弥助　「アー、やっと追いついたぞハハ……。生まれてくる子は男かなあ。」
おいね　「あらっ、あたいは女の子がいい、フフ……
♪♪大山街道飛ぶ鳥は、羽が十六、目が一つ♪♪」

おいね弥助

「♪♪　一の木、二の木、三の木、桜、五葉松、柳、やなぎの下で
鶴と亀とすべった♪♪　ハハハ、　ハハハ……」

ナレーター

村人は、おいねに対する不憫な思いを、少しでも和らげようとつとめました。村人のこうした思いが通じたのか、奇妙な出来事は次第に治まりました。

その後、おいねの畑に立てたお地蔵さんは、すぐ傍の海前寺の境内に移され、現在も手厚く供養され、車地蔵とよばれ、いつも様々な人形が山のように供えられています。

これは水子供養とも言われています。

村人の温かい心に、いつかはご恩返しをと、生前願っていて果たせなかったおいねの真心が、今、こうしてたくさんの水子の菩提を念じているかのようです。

ただ今、劇中で歌いました歌は、大山街道沿いの道端や、橋の上で遊んでいる子供たちが、小遣いのお金ほしさに旅人たちに向かって歌いかけたものと、言われています。

七堂伽藍

ナレーター

昔、下寺尾に大きなお寺がありましたが、火事で焼けて今はありません。この火事は、住職の比丘尼が、南湖の漁師の激しい苦情に堪えかねて寺を焼いてしまった、というお話です。

今から八百年ほど昔、現在の茅ヶ崎北陵高校の南の処に、海円院と言うお寺がありました。大きな規模ですので近在の人々は、七堂伽藍と呼んでいました。庭も広く現在の相模線香川駅の辺りまであったので、この辺には「堂庭」と言う地名が残っています。

海円院の住職は尼さんで、三十そこそこの美人。聡明で、気立てがいいので近郷の村人に慕われていました。

今朝も早くから、尼さんは勤めに励んでいました。

比丘尼

「摩訶般若波羅蜜多心経」を唱えています。

観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舎利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舎利子是諸法空相不生不滅不垢不浄
不増不滅是故空中無色無受想行識無限

耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至
無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死
亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無
罣礙無圭礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢
想究竟涅槃三世諸仏依般若波羅蜜多故
得阿耨多羅三菩三菩提故知般若波羅蜜
多是大神咒是大明咒是無上咒是無等等
咒能除一切苦真實不虚故説般若波羅蜜
多咒即説咒日
羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提娑婆呵
般若心経

ナレーター　その時、村人が野菜をもって得意顔でやってきました。

春吉　「比丘尼様ー、比丘尼様ー。」

比丘尼　「ああ、これは春吉さん、失礼しました。お早うございます。」

春吉　「お早うございます。お勤めご苦労さんです。あのよう初物が取れたんで持ってきましただあ。」

比丘尼　「まあまあご丹精なものを、いつも有り難うございます。今、お茶を入れますから一服していって下さい。丁度、私も喉が乾きましので……。」

春吉　「はあ……、そうしてえがヨ、おれが、ちっとでも、ゆっくりしてんと、かかあ

がいい顔しねえですよう……。」

比丘尼　「ホホ……、ご冗談ばっかり、お花さんが焼きもちやくんですか、ホホ……。」

春吉　「ハハ……、ではまた来ますので、じゃあ、せえならあ。」

比丘尼　「そうですか、ではまたお花さんとゆっくり来てください。そうそう、ちょっと待って下さい。お供え物のおいしいのがあるんですよ。おすそ分け致しますから。」

春吉　「けえって、すいませんよう。」

比丘尼　「いえいえ、では、おうちの方によろしく。」

ナレーター　この様に、比丘尼を慕って、信者を始め何かと用事を考え、時にははるばる海辺の方から、捕れたての魚を持ってくるやら、いろいろな客が引きも切らずあとを絶ちません。これ等のお供え物は暮らしが楽でない家へ分けてやるとか、また庫裏を開放して子供たちに読み書き、年寄りにはお経の手ほどきをするなど、村人と親しくしていました。

ある夏のこと、村人が、みすぼらしい年老いた男を担ぎ込みました。

ミネ　「比丘尼さまア、比丘尼さまア、この乞食が川っぷちで倒れてたんでさあ。」

カヨ　「なんとかしてやってくだせえ。」

ミネ　「まるで、魂が抜けたみてえにふらふら歩いてんで。」

カヨ　「こりゃあ危ねえなあと思ってんうちにぶっ倒れちゃったんでさあ。」

比丘尼　「まあ！　この暑さですもの、さあ、ミネさん、カヨさん、すいませんが庫裏までお願いします。」
ミネ　「はいっ。わかりました。カヨさん肩を貸してくんなよ。」
カヨ　「さあ、しっかりなせえよ。」

ナレーター　比丘尼はこの男を庫裏へ寝かせ、村人の手を借りて、てきぱきと手当をしました。

比丘尼　「別に病気ではありません。食べ物を満足にとっていないし、この暑さではたまりません。」
ミネ　「なんにも食ってねえんだ。」
カヨ　「比丘尼さんにみてもらえりゃ、へえ、でえじょうぶだ。」
比丘尼　「落ち着いたら食事をさせます。お腹いっぱい食べてゆっくり眠る、それが一番のお薬です。ミネさん、カヨさん、安心して下さい。」
ミネ　「よかった、よかった。」
カヨ　「それじゃあ、よろしくお願えします。」

ナレーター　そして、数日がたちました。乞食と思えるこの男は、比丘尼の親身な看護で、すっかり元気を取り戻しました。

比丘尼　「もう大丈夫、でも体力をつけなければいけません。陽気が涼しくなるまで、ここで養生なされるがよい。」

助三　「命を助けてもらって、そのうえ、それじゃあ済まねえです。」
比丘尼　「遠慮はいりませんよ、ところで名前は何と言われます。」
助三　「へえ、助三と言います。身寄りもねえひとりぼっちの乞食同様でごぜえます。」
比丘尼　「それはお気の毒に、そうでしたら、しばらく逗留なされるとよい。」

ナレーター　比丘尼のやさしさをひしひし感じる助三は、寺や境内の掃除、使い走りと一生懸命働きました。比丘尼も「助さん、助さん」と、頼りにして、いつしかすっかり寺男みたいになりました。
　しかし、おだやかな海円院には、大きな悩みごとがありました。それは、海円院のたくさんな灯明の明かりが南湖の海に映って、不漁が続き漁業で生活している漁師はもとより、ボテーからの苦情が日増しに激しくなっているのです。

漁師　「お灯明の故(せい)でよう、ろくに魚が捕れなくなっちまってんだよ。」
漁師女1　「あのお灯明は、なんとかなんねえかねェー。」
漁師女2　「へえ、なんどお願えにきてんかしんねえよ、いい加減にききいれてくだせえよ。」
漁師　「漁師ばっかりじゃあねえ、ボテーだってまるっきり商売上がったりだよ。」
漁師女1　「こんな不漁がいつまでも続きゃあ、みんな飢え死にしちまうだあよ。」
漁師女2　「比丘尼さんは、仏に仕えん人だんべ。あてえらの苦しみ、分かってくだせ

えよ。」

ナレーター　しかし灯明は、海円院独特のあつい信仰の現れであり、村に夜間の安全を守るためのもので、信仰と村の安全。その反面漁師の被害。

この板ばさみに比丘尼は日夜思い悩むようになってきました。漁師の苦情は助三の耳にも痛いほど入ります。そして日増しに苦悩が嵩じる比丘尼を見ていられなくなり、ある日助三は思い切って比丘尼に言いました。

助三　「比丘尼さま、いっそのこと、この寺を焼いてしまうほかございませんなあ。」

比丘尼　「いけません、何を言うんです。その様な恐ろしいことを、決して口にしてはいけませんよ。」

ナレーター　助三の言葉を戒めながら比丘尼は顔色一つかえませんでした。自分としても、火事の無残さ、その罪の重いことを覚悟の上で、心ひそかに助三と同じことを考えていたのでした。

夏も過ぎ、秋には大きな嵐もなく、村では稲の取り入れも無事に済み、海円院本堂仏壇には、豊作の品々が山のように供えられました。

ある夜のこと、比丘尼は何か不吉な予感に、どうしても寝つかれません。が、いつかうとうとと寝入った束の間、裏のほうでパチパチものの焼けるような音に目が覚めました。パッと跳ね起きるや、本能的に本堂に向かって走りました。本堂は既に煙が渦巻いていました。

比丘尼　「あっ、しまった。助さん、助さんはいないのう！」

ナレーター　煙を避けて、右往左往するうち、真っ赤な炎が広がり、あっという間に本堂は火の海になってしまいました。

助三　「火をつけたのは俺だ！　だが、御仏はみんな無事だあ！」

ナレーター　炎と煙の中から、いつもとまるっきり違う助三の声がしました。

比丘尼　「助さん助さんどこ！　これっ助さあーん。」

ナレーター　比丘尼は必死に走り回りましたが、助三を発見することはできませんでした。そして、さしもの海円院も遂に焼け落ちてしまいました。

助三　「つけ火は、俺だ、俺だ。お世話になりました。」

ナレーター　悲壮な助三の叫び声は、比丘尼の耳にいつまでも焼きついて消えませんでした。この猛火は天をも焦がすばかり、茅ケ崎の海を真っ赤に染めるほどでした。本堂の諸々の仏像は、そばを流れる小出川に投げ入れられて無事でした。梵鐘は小出川に落ち沈んでしまいました。

海円院の火事の後、南湖の海では元どおり豊漁が続くようになりました。

火事の晩から、助三はプッツリ姿を消してしまいました。比丘尼は助三のことを一切口を閉ざして語らず、自分が放火したのだと言い張りましたので処刑されることになってしまいました。

伝え聞いた南湖の漁師達は、その日近所の寺院にこもって、

訶般若波羅蜜多心経　を唱えています。

漁師達　観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄舎利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是舎利子是諸法空相不生不滅不垢不浄不増不減是故空中無色無受想行識無限耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸仏依般若波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多是大神咒是大明咒是無上咒是無等等咒能除一切苦真實不虚故説般若波羅蜜多咒即説咒曰

ナレーター　終日お経を唱えて比丘尼さまの冥福を祈りました。

この比丘尼の処刑については、つぎのような一説もあります。

比丘尼の処刑役の、尾形吉之進と言う役人は非常に人徳のある人で、刑が決まると、すぐに比丘尼に会って言いました。

尾形　「比丘尼殿、あなたが助三と言う寺男の罪を背負われることを、信者や村人は薄々気付いてはいるのです。そして、あなたの日頃の徳を思うあまり村中、信者一同が、お上に助命願いをしています。多くの人々の心に添うて、命長らえる心になってはいかがでござろう。」

比丘尼　「はい、皆様のお気持ち、かたじけのう存じますが、大罪を犯したことに変わりございません。」

尾形　「寺男を庇うその悲しみの心、凡人の及ぶところではありません。しかし、あなたは未だ若い、その大慈悲を以て不幸な、悩める人の心を救うて良い世の中をつくることに精進して下さらぬか。」

ナレーター　尾形吉之進の熱意のある説得で、漸く比丘尼も心を決めて、ある山寺の住職になり、煩悩にあえぐ人々の支えとなってその道を開き、多くの人々の感謝に包まれて天寿を全うしたということです。

七堂伽藍跡からは、瓦の破片や灯明皿などが出土しておりますが、なかでも大きな礎石が見つかり、堤にある民俗資料館の庭にその内の四個が並べられてあります。

平成十四年六月、北陵高校建て替えのため、発掘調査をしましたら、グラウンドの部分から郡役所と思われる建物跡と倉庫群四棟が発見されました。

七堂伽藍跡との関連が考えられます。国の史跡となるかもしれません。

新田の平太夫

ナレーター　馬入川に沿って、平太夫新田と言う地区があります。この地名は、徳川家康に滅ぼされた豊臣方の落武者と深い関わりを持ったお話です。

豊臣の家臣に、松下嘉平治と言う重臣がおりました。その一族の一人に松下平太夫という武士がおり、この人は文武両道にすぐれ、また温厚篤実で戦のない平和な世の中をといろいろ心を砕いていました。

平太夫　「戦の度に、農民は狩り出され、時に田畑は荒らされ家を焼かれることもある。巻き添えを食う人々こそ哀れである。天下泰平の世の中にしなくては……。」

ナレーター　ひたすら平太夫はそう願うのでした。

しかし大阪夏の陣で大阪城は落とされ、豊臣家は滅亡となり家臣は討死、あるいは全国各地に落ち延び、悲惨な運命をたどることになってしまいました。

松下平太夫は城外に討って出て奮戦しましたが、深手を負って倒れているところを、妻澄江に救われました。幸い、澄江は医術の心得もあるしっかりした女性でした。

澄江　「だんな様、豊臣のお家もこれまでございます。大阪を離れましょう。」

ナレーター　平太夫と澄江夫妻は大阪を後に東へ東へと落ちのびていきました。

澄江　「だんな様の念願の平和な世の中、江戸へ行けばいささかでもお力を出せる機会に恵まれるかもしれませぬ。」

平太夫　「そうだ、戦のない日本の国を見るまでは、死んでも死にきれない。」

ナレーター　天下泰平の国造りを願う執念は、二人を、生き恥をさらす無念のどん底から這い上がらせました。苦しい旅が続きましたが、気力と澄江の介抱で負傷の体は殆ど治りました。漸く箱根を越え、大磯、平塚と過ぎ、馬入川を渡り、茅ケ崎村に入ったとたん、今度は澄江がばったりと倒れてしまいました。

平太夫　「これ澄江、しっかりいたせ、どこか痛むのか。」

澄江　「いいえ、痛むところはございませぬが、足が重くてどうにも歩けませぬ。」

ナレーター　その時、畑仕事をしていた村人夫婦が心配そうに近づいてきました。

村人男　「どうしなすっただ？でえぶ疲れていなさるようだが。」

女　「顔の色が真っ青じゃねえかよ。ひどくなんねえうちに早く休ませたほうがいいだよ。」

男　「そうだなあー、それじゃぁひとまず俺んとこえきなせえ。俺んとこはぢきそこだから。」

女　「そしてゆっくりと休んでいかれるといい、でえじょうぶ、じきよくならあな。」

ナレーター　村人夫婦は、仕事の手を止めて、すぐ自分の家に案内しました。

平太夫　「かたじけない。とんだご迷惑をおかけいたす。」

澄江　「お仕事中、申しわけございませぬ。」

村人男　「なぁーに、もし急ぐ旅でねえなら、ゆっくり養生しなせえ。」

ナレーター　二人はこの村人の親切に感謝しながら、

平太夫　「それではお言葉に甘えて……、お願い申す。」

ナレーター　ほっとした気持ちとともに、胸が熱くなりました。

それから二、三日しますと、澄江は元気を取り戻しましたが、しばらくこの家で厄介になることになりました。この土地には、三軒の百姓家があり、皆純朴な人達でした。特に平太夫が自分達の素性を包み隠さず話したので、手作りながら住まいを作ってくれたり、農作物を分けてくれたりと丁寧な

扱いをされるようになりました。
平太夫と澄江はすっかりこの土地が好きになりました。

平太夫　「見渡す限り広大なこの土地、まだまだ荒れ地を開墾すればすばらしい畑になる。そうすれば村も豊に栄えるであろう。」
澄江　「それに村人へのご恩返しになると存じます。」
平太夫　「大変な仕事だが村人と共にやってみよう。」
澄江　「はい、私も一緒にお手伝いをさせていただきたいと存じます。」

ナレーター　早速、開墾の共同作業が始められました。武芸で鍛えた筋骨たくましい平太夫は人一倍働きました。そしてこの事がきっかけとなり、この村に住み着く人もだんだん増えて、見事な畑がますます広がりました。
一方、澄江も忙しい毎日を送っていました。

村人3　「澄江様、読み書きを教えて下せえ。」
子供1　「おらにも読み書きを。」
子供2　「おらには、そろばんも教えてくんろ。」
子供3　「あたいも読み書き、そろばんを習いてえ。」
村人4　「澄江様！、大変だ！吉っつぁんが屋根から落ちて足をけがしただよー。」
女　「澄江様、家の子がぐったりしてるだー、助けてくだせえー。」

ナレーター　と、澄江には村人の声を聞かない日はありませんでした。

この平和な土地にも二つの悩み事がありました。
その一つは、夜盗の襲来でした。豊かな村になって来たので、毎年ききあき(収穫期)には、必ずと言っていいくらい襲われました。
時には、おんな子供もかどわかされる事態も起きました。
ある夜。

村人男　「平太夫様、平太夫様。夜盗だ！！用心して下せえ。」
平太夫　「なに夜盗だと、心得申した。皆さんは外へ一歩も出てはなりませんぞ。家の中にいてくだされ、心配無用じゃ。」
澄江　「私も賊と闘います。」

ナレーター　澄江は薙刀の心得がありますので、かねてから用意しておいた木刀を手にするや夜盗の群れに立ち向かいました。
激しい戦いの末、夜盗は命からがら一斉に逃げ去り、以来この地方を襲うことは全くなくなりました。
さて、もう一つの悩みごとは洪水でした。

平太夫　「こう度々、大雨の後に川が氾濫するとはなぁ。」
村人男　「また作物が皆やられてしまっただ。」
村人3　「この前は、川の近くの家が流されて全部なくなっただ。」
村人4　「せっかく、汗水流して作ったって言うのによー、全くやんなっちゃうよ。」

澄江　「だんな様、なんとかならないものでしょうか。」

平太夫　「うーん、洪水を防ぐ方法を考えてみよう。」

ナレーター　平太夫は土手の崩壊を防ぐ堅固な作り方の研究に取り組みました。この苦心の研究は何年かあと、蛇篭式などの強固な堤防作りに大変参考になりました。

しかし、自分の考案した完全な堤防の成果を見ず、元和七年（一六二一）平太夫と澄江は相次いで亡くなってしまいました。

村人は平太夫夫妻の徳を心から尊敬し、その後村を平太夫新田と呼ぶようになりました。

新田地域の氏神様、八幡神社の境内に、松下平太夫の墓碑が立っています。本体が一メートル、台座からはおよそ二メートルの立派なものです。

現在も毎年十二月一日に、新田自治会の有志が墓碑のところに集まり、信隆寺の僧侶を招き丁寧な供養が続けられています。

晴明井戸

ナレーター　平安中期の或る年のこと、一条天皇の勅命で諸国を巡っていた安部晴明が、下町屋村のあたりまで来ますと、陽は西に傾き薄暗くなってきました。人影は無く街道の松並木は風に揺れて不気味な音を立てています。

突然、覆面をした二人の武士が立ちはだかりました。

晴明　「何者じゃ、安部晴明と知ってのことか。」

ナレーター　だが二人の武士は無言で太刀を抜きはなち、じりじりと迫ってきます。危険を感じた晴明は、

晴明　「ううん、ならば是非もない。しかし、漸く帝のお役目をはたせるのを間近にして、無念じゃ。この様な所で訳も分からず果てるとは……。」

ナレーター　悔しい思いがこみ上げました。その時何処からか年老いた白い狐が現れ、武士の後ろへ飛びかかって噛みつき始めました。これには武士も驚き思わずひるんだ隙に、白い狐が晴明を傍らの背丈程もある草むらの中へ引き込みました。

武士1　「おのれ、逃げるか。」

武士2　「そうはさせぬぞ、覚悟せい。」
晴明　「なまくら武士ども、逃げ隠れいたす晴明と思うか。いざ参れ。」

ナレーター　草むらから晴明が現れました。これは白い狐がとっさに晴明に化けたのです。度肝を抜かれた武士は、まさか白い狐が晴明に変わったとは知らず。

武士1　「エーイ、こしゃくな。」
武士2　「何をほざくか、今度こそ逃がさぬぞ。」

ナレーター　「ギャー」痛ましい叫びとともに晴明は倒れました。その体から血が吹き出すのを目にした武士は、

武士1　「おお仕留めた、やったぞ。」
武士2　「ようやく親分の言いつけに応えたぞ。」

ナレーター　晴明は、この一瞬の出来事に、なすすべもなかった。草むらから飛び出し、血に染まった白い狐を夢中で抱き起こしました。

晴明　「しっかり、しっかりしてくれ。」
白い狐　「晴明…、無事でよかった。」

ナレーター　かすかにそう聞き取れたので、晴明は思わず、

晴明　「身代わりになってくれたのは、母上か？若しやとは思ったが。」

ナレーター　白い狐はうなずいた様です。

晴明　「母上！母上！ああやっぱり。」

ナレーター　年老いた白い狐が、晴明の目には、生き別れた母の姿に変わっていました。

晴明　「母上！死んではなりませんぞ。気を張ってくだされ。」
白い狐　「保名殿に…、よろしく伝えてくだされ…。
母はいつもそなたの傍らで、行く末長く守っています。」
晴明　「はい、晴明も母上といつまでも一緒です。」

ナレーター　白い狐は満足した笑顔で静かに息をひきとりました。
その時、村の百姓、権七夫婦が通りかかり、白い狐を抱いて悲しむ晴明に気づきました。

権七女房　「あれ！お前さん、あそこんとこに変なのがいるよ。」
権七　「俺もな、白え狐へ泣いて話しかけてんなんて、おかしな奴だと思ってんだ。」
女房　「薄っきみ悪いから近よんねえで、他の道を帰んべえよ。」

権七　「だが、なんか、見過ごしていかれねえ様な気がしんだよなあ。」
女房　「そんなこと言ったって、でもお前さんがそう思われんなら。」
権七　「ま、いまちいっと傍へいってんべ…。若し、若しどうしなさった。」
晴明　「ああ、はい。村の方でござるか。私は安部晴明と申す旅の者で、賊に襲われまして……。母の化身であるこの者が命を落としました。」
権七　「やっぱりなー、なんか訳があんと思った。」
女房　「かええそうにょう…、なあ、おめえさん、へえ日も暮れちまあし、詳しいことは、後にして家へ泊めてやったら。」

ナレーター　晴明の人柄や身なりの良さ、言葉づかいの様子から、夫婦は不安の気持ちが同情に変わってひとまず家へ連れて帰りました。
その夜、晴明は自分の素性を打ち明けました。

晴明　「私は天文博士の位を賜り、一条天皇の勅命を帯びて諸国を巡っているものです。
母は狐であったと聞かされております。今日はその狐に命を救われました。
父は安部保名と申しまして、帝から寵愛されているのを妬んで、石川悪右衛門が常に私をねらって居り、今日もその者共に襲われたものと思います。」

権七　「そういうことだったら、まだ危ねえと思うんで、しばらく逗留しなさるといいですだぁ。」

ナレーター　しばらく厄介になっているうちに、いろいろと村人の温かい心が身にしみて、

晴明は、御恩返しをしなければと考え、権七や村人に相談しました。

晴明　「諸国を廻って感じたのは、大抵の農村が、飢饉の準備がないことです。
皆さんが共同で普段農作物を蓄えておく穴蔵を造っておけば、いざという時、飢えに苦しむことはありません。場所さえ二個所決めて下されば後のことは、一切任せていただきたい。」

ナレーター　村人は大喜びで賛成、場所を神明神社境内北側の所と、境内から北へ二百メートル先の竹やぶの中と決まりました。帝の援助もあって、一年程で完成し、後年起きた飢饉に村人は度々救われました。

村人1　「晴明様のおかげだ。」
村人2　「ひもじい思いもしねえで、ありがてえことだ。」

ナレーター　と、喜び合いました。
穴蔵は盗賊から防ぐために井戸のように見せかけ、厳重なふたで覆って晴明井戸と呼び、やたらにこの井戸水を飲むと災難があるなどと言い触らしました。
歳月は流れて、竹やぶのところには梅雲寺が建立され、神明神社の処も防火用水につくりかえ、更に昭和十年ころ、東海道が広がるので埋め立てられ、国道一号線の一部になってしまいました。

下町屋では、子供から孫へと語り伝えられた安部晴明を忍んで戦前まで毎年十月一日、神社の祭礼に『葛の葉伝説』の歌舞伎芝居を奉納しました。

『葛の葉』というのは一人の美しい女の名前です。

安部保名に命を助けられた白狐の化身でした。

保名が悪人たちに都を追われ、恋人の「榊の前」を失って放浪している時に、白狐が榊の前の妹で、榊の前そっくりの葛の葉姫の姿になって現れて、保名を慰めました。命を助けられた恩返しでした。

大阪の郊外阿倍野に二人は所帯を持ち、一人の子供をもうけました。安部晴明です。

ある日、本物の葛の葉姫が両親と訪ねてきたので、今はこれまでとわが本性を語り、わが子と涙ながら別れる時、障子に一首の歌を残して、すすきと乱菊の咲き乱れる野原に姿を消しました。

『恋しくばたづねて来てみよ和泉なる　信田の森のうらみ葛の葉』

恋しくなったら訪ねて来てみなさい。

和泉国信田の森こそ我が住みかですよ、ということですネ。

後世には晴明の母親が狐であったという伝説が生まれ浄瑠璃や歌舞伎で知られる『葛の葉伝説』などができたのではないでしょうか。

堤の巴御前

ナレーター　昔むかし、堤村に安吉、おかねという中年の百姓夫婦がいました。二人とも百姓向きの丈夫な体で、作物作りが上手なのでいつも豊作でした。又、村人との付き合いもよく、何一つ不足の無い暮らしでしたが、未だ子供に恵まれませんでした。

ナレーター　夫婦は早く子供が欲しい、欲しいと鎮守様の諏訪神社に願をかけるようになりました。

ある日のこと、いつものように野良の帰り、お諏訪様へお参りしました。

安吉おかね　「ドーゾ、子供をお授けください。」

ナレーター　お参りを済ませた目の前の賽銭箱の脇に、きれいな産着に包まれた赤子がすやすやと眠っているではありませんか。

安吉おかね　「アレ！　赤ん坊だよう。」

おかね　「なんてまあ可愛い。」

安吉　「捨て子かな。」

おかね　「でも、そんなふうにゃ思えねえ。」

安吉　「そういえばそうだなあ。」

おかね　「お前さん、こりゃきっと、お諏訪さんの授かりもんじゃねえか。」

安吉　「まさかあー、そんなことー、だがことによると、お願げえを叶えてくだされたのかもしんねえ。」

ナレーター　信じられねえ、信じられねえ、そう思いながら、とっさに夫婦は赤子を抱き上げて、

安吉おかね　「お諏訪様、ありがとうごぜえます。」

ナレーター　思わずお礼の言葉を口走りました。そして、夫婦はお諏訪様からこの赤子を抱き、ありがたさと、もったいなさと、こんがらかった心地で家へ帰りました。

赤子は女の子でした。「なか」と名前をつけてたいそう可愛がって育てました。

その甲斐あって、おなかは丈夫に成長しました。が、友達は男の子ばかりで泥んこになって遊んだり、喧嘩をしたりの明け暮れでした。まるで男の子のように、だんだん逞しくなると山へ行ってけものを追い回すやら、木や岩を相手に剣術のけいこまで始めました。読み書きも熱心で寺の和尚さんのところへ通って学問に励みました。

月日も流れて、おなかも十八歳になりました。美しく、気立ても良く、村の評判娘になりました。

その秋のこと、凶悪な賊が役人に追われて諏訪神社に立てこもり、村人を

脅迫するという大騒動が起きました。

賊1　「村の娘を酒の酌に差し出せ。」

賊2　「言うことを聞かなければ、神社も村も火を放って焼き払い、村人も皆殺しにする。」

ナレーター　恐ろしいこの脅しに、村人は震え上がりました。

安吉　「お諏訪様を焼くなんてとんでもねえ。」

村人1　「汚すだけでも勿体ねえのによお。」

村人2　「お諏訪様の罰が当たるから。」

名主　「娘を差し出せなんて…、こりゃ人質だ、とんでもねえ。」

村人1　「早く女達を逃がせろ。」

名主　「村の娘を人身御供にすることはできねえ。」

村人2　「しかしその仕返しを思うと。」

賊1　「何をごちゃごちゃ、早くしろ。」

ナレーター　村人はただただ恐れおののくばかりです。恐怖の最中じっと「おなか」は思案していました。そして決心がまとまると、両親に申し出ました。

おなか　「あたいがお宮へ行く。賊のところへあたいをやって。」

安吉　「何を馬鹿なことを、みすみす人身御供を承知で。」
おなか　「では誰が行くの？　誰かが行かなきゃお諏訪様は焼かれちゃうじゃねえの、村中火の海になっちまうんだよ。」
おかね　「だからといって、おなか…。」
おなか　「恐ろしいことは覚悟の上だよ、あたいはよく考えたんだよ。それは、あたいが賊のところへいって刻をかせぐから、その間に足の達者な若いしゅうが今の村の様子を役人のところへ知らせるんだよ。役人が来たら、村の男はみんな大声を上げてお宮へ押しかけてきておくれ。それを合図にあたいが頭を押さえて、逆に人質にしてしまうから、そうしたら仲間はもう手向かいはできない。お母さん包丁だけ貸しておくれ。」

ナレーター　じっとおなかの計画を聞いていた安吉夫婦には、「おなか」が急に神様のように見えました。
とに角、村人に相談することにしました。

村人1　「女だてらに危険なことだ。」
名主　「おなかちゃんありがとう。だがな、安吉さんやおかねさんの言う通りだよ。」
村人2　「いくら気丈なおなかちゃんだって、こいつは無理だよ。」
おなか　「名主様、どうかお宮へ行かせてください。きっとうまくやります。」
名主　「じゃあおなかちゃん、みんなに替わって御願いする、この通りだ。」

ナレーター　名主は土下座をせんばかりに頭を深々と下げました。

村人1　「頼むよ、くれぐれも気を付けてな。」
村人2　「安吉さん、おかねさん、ありがてーなー。」

ナレーター　結果は「おなか」の筋書き通りに運んで、一人の犠牲者も出さずに成功し、この騒動は無事解決し、堤村は元の平和な村になりました。
このことは大岡越前守の耳にも入り、名主を通し、大岡家で働いてと所望されました。しかし「おなか」は両親の傍を離れたくないと辞退しましたので、それなら両親も江戸で、小石川養生所で働いてはと、再度話がありました。

名主　「大岡様がこうまで所望されるのは、おなかちゃんに期待をかけておいでなのだ、お受けしておくれ。」

ナレーター　名主に勧められ、一家は江戸へ移り住むことにしました。村はまた平穏を取り戻しました。お盆には辻々に集まって盆踊りなども見られるようになりました。近郷近在ではおなかの武勇をたたえてだれ言うとも無く「堤の巴御前」と大変な語り草となりました。が、長い年月の間にいつしか消えてなくなりました。

南郷力丸

ナレーター　昔、南湖の海は、鰤、鮪、シラス、鯛などいろいろの魚が沢山獲れました。ですから網元も何軒もあり、その中に南湖船という網元がありました。

この家の力丸という若者は実子ではありません。夫婦に子がなかったので、子宝をと浅草の観音様に月参りしていましたが、満願の日に境内の捨て子を発見、仏様のお引合せと抱き帰って、わが子のように大事に可愛がって育てました。数年たって、「みや」と言う娘も誕生しました。

力丸は自分の素性がわかってくると、だんだんとひねくれ始め身を持ち崩し、村の人達にも毛嫌いされるようになりました。そんな力丸も「おみや、おみや」と、美しく気立ての良い「みや」を、可愛く思っていました。

ある日、平和な村に突然大きな事件が起こりました。「おみや」が、関八州を荒らしているサソリ党という盗賊に誘拐されたのです。一味はカーキ山に立てこもり、「おみや」を人質として南湖船に五百両の身代金を要求してきました。さあ、村中は大騒ぎとなりました。

怒り狂ったのは力丸です。カーキ山に駆けつけました。

力丸　「やい！やい！なんて真似しやがる。おみやを返せ！けえせ！」

ナレーター　サソリ党に向かって大声で叫びました。すると

おみや　「力丸兄さーん、助けてー！」

サソリ党　「若僧、ちかよるな！娘はこの通り無事だ。下手な真似をすると命はねえぞ！いいか、五百両と引きかえだぞ！ぐずぐずしていると娘ばかりか、南湖を焼き払うから覚悟しろ！」

力丸　「チエッ！　畜生、ちくしょう！」

ナレーター　流石の力丸も赤子のよう、手も足も出ません。

サソリ党のこの脅迫は、大火事に怯りている村人、南湖船の人達をいっそう震え上がらせました。が、村人は右往左往し、ただ慌てふためくばかりです。夕闇が迫ってきましたが、力丸の姿がありません。

村人1　「力丸の奴、恐ろしくなって逃げ出したんだ。」

村人2　「全くあきれたもんだ。」

ナレーター　と、ののしりました。とうとう夜になってしまいました。

時折「おみや」の「助けてー！」と叫ぶ声が聞こえ、村人達の恐怖は募るばかりです。

その頃、姿の見えなくなった力丸は、夜道を江ノ島へ向かって、遊び仲間の『弁天小僧菊の助』に助けを求めに走っていました。

力丸　「やっしょ、やっしょ、やっしょ、……」

ナレーター　ようやく江ノ島へ着きました。

力丸　「弁天のー、いるか、俺だ、力丸だ。」

ナレーター　運のいいことに、弁天小僧は家にいました。そればかりでなく、白波組という菊之助の仲間が仕事の打ち合わせに集まっていました。
頭分の日本駄衛門もいます。力丸から一切の事情を聞いた白波組は、

日本駄衛門　「弁天小僧の仲間とあっては、力を貸さねばなるまい。仕事のことは後にしてすぐ南湖へ参ろう。」

力丸　「ありがとうございます。ありがてえことでございます。」

ナレーター　夜も白々と明ける頃、カーキ山深く、サソリ党と白波組が相対しました。

日本駄衛門　「サソリ党出て参れ！白波組の膝元でこしゃくな真似は許さんぞ。わしは日本駄衛門だ！取引しようではないか。娘をすぐ返せ！

サソリ党　オーイ、聞こえているか、その代わり、身代金は白波組が必ず用意する。」

おみや　「よーし、分かった。約束は必ず守れよ！娘は放すから受け取れ。」

力丸　「力丸兄さーん。」
「よかった、よかった、どこか痛いところはねーか？」

ナレーター　おみやは力丸にすがってうれし泣きに泣きました。

村人1　「よかったなー、おみやちゃん。力丸は本当にやさしくて機転の利く男じゃねえか。」

村人2　「おみやちゃん思いのいい兄貴だ。」

ナレーター　このことがあってからは、村人は力丸に好意を持つようになり、力丸も又、村人と温かい付き合いを取り戻すことができました。
しかし、白波組の恩義を深く感じた力丸は、南湖船の人達や南湖の村人、おみや両親とも別れ、白波組に加わることにしました。
しかし、いかに義賊といえど、白波組は悪党に代わりなく、力丸はその後、享保六年（一七二一）九月、三十才の若さで処刑されました。
これを伝え聞いた南湖の人達は、力丸の墓碑を建て冥福を祈りました。
現在この墓碑は西運寺の本堂前にあり、西運寺と南湖の熊澤修平氏により供養されています。
力丸が茅ヶ崎生まれと言うのは、伝説という人もいます。江戸末期の悪の美化をねらいにして河竹黙阿弥が五人の義賊を狂言に仕上げ、市村座のために書き下ろしたのが「白波五人男」です。日本駄衛門は実在した「浜島庄兵衛」をモデルにしたものであるのは当時の文献から明らかにされています。黙阿弥が五人の盗賊の組合せにあたっては親友の仮名垣魯文の知恵を拝借したと言われています。仮名垣魯文の父は茅ヶ崎生まれです。
力丸が茅ヶ崎生まれというのは伝説という人もいますが、まんざら伝説とばかりは言えないかも知れません。

なんどき橋の幽霊

ナレーター　昔、江戸から西へ向かう東海道茅ヶ崎の左富士の名所よりさらに西へ向かうと、今宿橋という橋がありました。

この付近は武士やお百姓、商人など人通りの多い松並木の道でした。橋の近くには特別大きな木が繁っていました。川には、鮒や鯉、うなぎ、なまずなどがたくさんいて、釣りを楽しむお百姓さんや子供たちが泳いだりして遊んでいました。

しかし、夜になると橋のあたりは不気味な静けさでした。

茅ヶ崎村南湖に、南二郎と言う生真面目な若者がいました。

ある日、たまたま友達に誘われ始めて平塚の旭楼と言う遊郭へ遊びに行きました。相手の遊女は、トキノと言いました。

トキノ　「おらあトキノというだ。」

南二郎　「俺は茅ヶ崎のもんで、南二郎というだ。」

トキノ　「南二郎さんは、こったらだところ初めてみてえだねえ。」

南二郎　「ん、そうなんだ。」

トキノ　「おらあ、ここさきたばっかりだから。」

南二郎　「ほう、どこから？」

トキノ　「おらの故郷は、津軽だあ。」

南二郎　「それやぁ、また遠くから。」

トキノ　「んだ。だけども、ここで働いてる人はみんな遠いとっから来てる。おらんとこは貧乏百姓で、じいさまとばあさま、それにおとう、おかあ、そのうえさ、きょうだいが六人の大所帯でのう。おととしも、去年も不作だったもんでどうにもならねえだ。おなご三人きょうだいが、てんでに売られて働くことになったんだー。」

ナレーター　うぶなもの同士の南二郎とトキノはすっかり気が合ってしまいました。それからは暇を作っては足繁くトキノに逢いに行くのでした。

母親　「南二郎、この頃よく出掛けんなー。畑のほうは大丈夫かよー。あれ、また今日も行くのかよ。」

南二郎　「畑仕事はちゃんとしているよ。」

母親　「そんならいいけんど、近所の笑い者になんねえようにな！」

ナレーター　親の声を背中で聞き平塚へと向かいました。旭楼へ着くと、トキノも待ち構えていました。

トキノ　「南二郎さん、待っていただあ。」

南二郎　「俺も逢いたかった。」

トキノ　「おらあ、二日も逢わねえと一ト月も逢わねえような気がしちまあだよ。そうそう、いいものを見つけたあ。」

南二郎　「何だよ。」

トキノ　「ホラ！　三味線だ。棹が太くてこれはおらの故郷津軽のものだあ。」

南二郎　「お前、できるのか。」

トキノ　「んだ。うまくはねえけど。津軽は雪の深いとこだもんで外の仕事は出来ねーそんな時教えてもらったこともあったもんで。」

南二郎　「そーか、トキノはえれえな。俺に聞かせてくれ。」

ナレーター　南二郎の頼みにトキノは三味線を弾き始めました。

南二郎　「うめえもんだ。俺は始めて聞かせてもらった。」

トキノ　「うれしいだあ。南二郎さんにほめられて。」

ナレーター　何回か逢っているうちに二人は離れられなくなり、とうとう夫婦約束にまで進みました。南二郎は今まで以上に良く働き、そして両親や親戚にトキノの身請けを頼み続けましたが、女郎を嫁になんかとんでもねえと、大反対でした。

半農半漁を暮らしとする南湖では、世間体もあり遊女の身請けなど途方も無いことで、南二郎の願いは、はかない泡のようなものでした。

間の悪いことは重なるもので、麦の刈り入れ、浜での祭と猫の手も借りたいような忙がしい日が続き、数ヶ月がたちました。この間にトキノは悪い病に冒され養生所へ移されました。そこは治った者は一人もいない、お化け屋敷

と言われているところでした。南二郎は知る由もありません。
トキノの容体は日増しに悪くなりました。

トキノ　「南二郎さんに一目会って死にたい。」

ナレーター　と、言いながら、息を引き取りました。
トキノの執念は、南二郎がいつかはきっと渡るであろう今宿橋へ夜ごとに魂だけが現れ、

トキノ　「南二郎さーん、トキノでーす。」

ナレーター　と、叫ぶようになりました。村人の耳には、ただ、

トキノ　「なんどきよー、なんどきよー。」

ナレーター　と、聞こえました。
ある日、もう夜明けが近い頃、一人の旅人が道を急いでいました。

旅人　「アーア、困ったなぁ、もうすぐ夜が明けるというのにまだ行き着かない。ずいぶん遠いんだなぁ。それにしても気味の悪いところだなぁ、家なんか一軒も無いじゃないか。」

ナレーター　旅人はブツブツ言いながら、今宿橋に差しかかりました。その時、今までは月も出ていてあたりは明るかったのですが、急に黒い雲が月を包みました。風もないのに橋の下の水が、パシャ、パシャと、音を立てました。旅人は思わず体がゾクゾクッとした時、なんと橋の下から白い手がニューと伸びてきて、いきなり旅人の足をつかんだのです。

旅人　「ギャアアー――。」

ナレーター　その手は水にぬれて、とても冷たかったのです。

旅人　「ワアー、出たぁー、お化けぇーだぁ――。」

ナレーター　旅人は逃げようとしますが、ものすごい力でつかまれて動けません。
そして、

トキノ　「な・ん・ど・き・だぁ――。」

ナレーター　と、言う女の声が聞こえてくるではありませんか。

旅人　「あ、あ、明け方だぁー。」

ナレーター　と闇に向かって大声を上げました。すると何でもなかったかのように、手は橋の下に消えあたりは元の明るさに戻りました。

このとき、夜中の時刻を答えた者にはしつこく付きまとい、橋を渡る旅人たちから恐れられていました。

この話が旅人の口から口へと江戸まで伝わり、誰言うとはなしに「何時橋」と言われるようになり橋の近くには、夜店や、何時そば屋などが立ち並びユーレイを見に来る人々でにぎわったという事です。

今では、国道一号線と産業道路が交差したところで、交通の要所となっています。

萩園の花女郎道

ナレーター　萩園は、国道一号線の今宿から寒川神社方面（向かう県道を二百メートル入ったあたりで国道寄りが辻、北のはずれを番場というように、この部落には山谷とか、十二天等二十近い地名（小字）があります。北は寒川町田端で、東は小出川を境に、西久保、浜之郷、下町屋、南は今宿、西は相模川と平太夫新田です。

昔むかーし、のどかな萩園村に彼岸も過ぎて春の訪れが一段と感じられる頃奇妙な出来事が頻々とおきました。

南湖に忠兵衛という魚の行商をしている人がいました。売り場は萩園が主で、寒川の田端まで足を延ばすと、いつもだいたい売り切れます。今日も売れ行きが良く、もともと話し好きのせいも有りますが、つい調子に乗っておしゃべりが過ぎて辻の森にさしかかった頃には日もとっぷりと暮れていました。

ところが、かついでいる魚の籠が急に重くなって肩にくい込んできます。

忠兵衛　「あれ、籠は空っぽだによう。」

ナレーター　つぶやきながらいつものしぐさで右から左へ天秤棒を、ひょいと架け替えようとして尻餅をついてしまいました。

忠兵衛　「なんてこったいハハハハハ……。俺も、もう年だなー。」

ナレーター　だらしなさをてれ笑いで打ち消しながら家へ着き、さて懐中の胴巻きを取り出そうとしましたが有りません。

忠兵衛　「確かに、ちゃあんとしめといたんだによう。落っこちる訳がねえ。アッ、そうだ、あの辻の森がおかしいじゃねえーかー。」

ナレーター　青くなって辻へかけ戻って、もう暗くなったあたりを一生懸命探しましたがありませんでした。つづいて今度は、この辻の森を晴れ着で通った娘が家へ帰った途端、着物がはがされていて、真裸の自分に気がつき、息が止まるほどびっくり仰天するやら、それからそれとこのような事が続きました。

村人1　「キツネに化かされたんだ。」

村人2　「ウーン、そりゃあそうも考えられるが、どうも腑に落ちねえ。」

村人3　「キツネのしわざだけじゃあねえみてえだなあ。」

村人4　「なんかおかしい。あたしもそう思うなー。」

ナレーター　このような噂が村中にひろがるようになりました。

ある日「およね」という村の娘が川向こうへ使いに行ったまま、夕方になっても帰って来ません。時が時だけに村中の騒ぎになりました。村の人たちが手分けして探しましたが夜になっても分かりません。

村人1　「今宿のもんが夕方辻の方へ急ぎ足で行く「およね」を野良の帰りに見かけたんだとよ。」

村人2　「やっぱり辻の森あたりが怪しい。」

ナレーター　一晩中探しましたが、とうとう行方はつかめませんでした。そしてまたたく間に数日が過ぎました。

そんな折りも折り、寒川から南湖へ輿入れの行列がありました。花嫁さんは籠で、その前後に婿さん、仲人、親戚、客人。それに箪笥、長持ち、鋏み箱、酒樽など色とりどりの物をかつぐ供の人々とで、二、三十人の賑やかな長い長い行列です。番場あたりからだんだん夕暮れも深くなって来ました。

供1　「辻あたりへ行ったらもう提灯をつけなくちゃ。」

供2　「そうだね。そこらで一休みしていくべえや。」

供3　「辻を過ぎりゃ、もうじき南湖だもんなあ。」

ナレーター　輿入れ先の家へ着くのは、大体夕刻というならわしなので、人々は予定の時刻に、ほっとした気持ちで一層陽気になって辻の森まで来ました。

仲人・夫　「さあ皆さん、婿さんの家ももうじきだで一休みしてくだせえ。」

ナレーター　仲人の声で花嫁さんの籠が降ろされました。それぞれの提灯にあかりが入

りました。夕闇にぱあっと花が咲いたような何ともきれいな風情になりました。

仲人・妻　「さあさあ花女郎さんも一休みしましょうや。婿さんの家ももうじきだんべー。」

ナレーター　仲人さんが籠へ手をかけました。瞬間、花嫁が籠から転がり出ました。

仲人・妻　「あれ、まあよ。」

ナレーター　あわてて仲人さんは花嫁を抱き起こしてびっくり！

仲人・妻　「花…花…花女郎さんが死んでる。」

供1　「ヒヤ。ああ、玉ちゃんが玉ちゃんが、ああ、し、死んでる。」

供2　「なに！」

供3　「何、なに、なに！」

供4　「いってえ、どうしたんだんべー。」

ナレーター　みんな籠へ駆け寄りました。花嫁は血まみれになっています。しかも花嫁の首がなくなっているではありませんか。

花嫁の親　「お玉やー。」

ナレーター　抱いたままの仲人の「おやす」さんも気を失っています。

供たち　「お玉ちゃん、お玉ちゃん、おたまちゃーん。」

仲人・夫　「これ、おやす。」

供たち　「おやすさん、おやすさん、おやすさん。」

ナレーター　花嫁に取りすがる者、仲人さんに取りすがる者、泣き叫ぶ声は、森にこだまし、ほうり出された提灯は鬼火のように燃え上がり、たちまち修羅場に変わりました。

幸い仲人さんは、まもなく意識を取り戻しました。このことがあってから、辻の森は噂は噂を呼んで、村や道行く人の不安を一層つのらせました。

この萩園村に文三という若者がいました。文三は、急に頻々と起き始めた辻の森の奇怪な出来事を何とか解決しなければと村の若衆仲間といろいろ相談しました。

文三　「このままにしておいたんじゃあ犠牲が増えるばかりだ。」

若者1　「萩園の名にもかかわる。」

若者2　「夜どおし俺たちが森に居ても、辻を通ってもなにも起きねえ事を考えると女を狙ってんじゃあねえか。」

文三　「俺もそれを考えていたんだ。それも若い女をよ。」

若者3　「文三おめえ、女に化けろ、おとりになってくれ。そうすりゃ正体を現すにちげえねえ。そこを俺たちがふんづかめえるから。」

ナレーター　更に、慎重に策を練って、ある夜実行に移しました。そうしてこの計画は見事に成功しました。その妖怪の正体は、やはり若衆たちの睨どおり、当時世間を騒がせていた悪質なぜげん(女衒)一味が、キツネをうまく利用しての仕業だったのでした。この若衆達の機知に富んだ勇敢な働きで辻の森にはその後、怪しげな事は何一つ起こらなくなりました。

その後、川向こうへ使いに行った帰りに辻の森で行方知らずになっていた「およね」という娘は、遊郭へ売られる寸前に無事救われました。

だがお玉という花嫁さんの痛ましさを人々は忘れることができませんでした。せめてもの供養にと、森の南のはずれに『かしらなしづか』(頭無し塚)という碑を建てました。それ以来、婚礼を初め全て祝い事の行き来にはこの道を嫌って通らず、遠回りして、この森の西のほう、辻町の中程にある山王様というお宮の前から、今宿の松尾神社の脇へと通ずる雑草が茂る細い野良道を行き来するようになりました。そしていつしかこの道は、花女郎道と呼ばれるようになりました。その後、首の無い死体となった花嫁のお玉も遠く離れた土地で痩せ衰えるほど苦労して居るのが分かりました。これもぜげん一味がキツネを利用しての仕業でさらわれていたのでした。お玉もこうして無事帰ることができました。そして改めて輿入れを済ませて幸せになりました。頭無し塚は、現在残っていません。この花女郎道は、全長五百メートル、幅一、五メートルで、現在はきれいに舗装されています。

八大龍王

ナレーター　茅ヶ崎海岸のサイクリングコースの北側に沿って八大龍王の碑が、柳島・南湖・中海岸・小和田に建っています。八大龍王とは、海上の災難を防ぐ神様と言われ、漁民の信仰があつく、それぞれに亀との結びつきの話が伝えられています。

昔、むかし、茅ヶ崎村に源三という若い漁師夫婦がいました。ある時化の日のこと、船を見回りに行くと一匹の亀が陸へ上がってきました。亀は卵の産み場所を探すために波打ち際から砂浜に行ったりきたりして足跡をいっぱいつけます。それは卵を外敵から守るために産卵の場所を隠す習性があるからだそうです。また、お産の重いことは有名で陣痛時の声はあたりに響き渡るということです。

源三が見た亀はちょっと様子が違いました。亀が海へ戻ったので、その場所を掘り起こしますと卵とはまるっきり違う固いこぶし大の玉が一個出てきました。海水で洗ってみますと目もくらむ様なきれいな玉でした。

源三　「わあー、こいつはすげえや。」

ナレーター　源三はなにか貴い物のような気がして、急ぎ家へ帰り戸棚の上に置いてしばらく見とれていました。次の日は昨日とうって変わったすばらしい凪となりました。小船に乗り平島の沖で漁をしていますと

お初　「源三さん。源三さん。」

ナレーター　優しい女の声が船底のほうでします。

源三　「誰だ。」

ナレーター　船べりから下を覗くと、美しい娘の顔がポッカリと波の上に浮かんで、

お初　「昨日あなたが拾われた品ですが、あれは竜宮城の乙姫様の大切なものなのです。それが意地悪な亀に盗られて困っていました。私は召使いの初と申します。あのお品を返していただきたくて乙姫様の使いで参りました。どうぞお願いいたします。」

源三　「フーン、やっぱりなぁー。　普通たぁちがぁと思ってたらそんなでえじなもんだったのか。」

お初　「お返し頂ければ、龍王さまが秘蔵の品を姫様に代わってお礼に差し上げると申されております。」

源三　「そうけぇー。よし、じゃあよ明日の今時分ここんとけぇもってくらあ。」

ナレーター　源三が次の日約束の場所へ来ますと、召使いの初と共に乙姫様が待っていました。

お初　「ありがとうございます。お礼に竜宮の宝物・玉手箱を龍王さまから預かって参りました。この箱は海上で離儀された時、この箱にお願いしますと必ず無事ですみます。でも決して中を開けてはいけません。と龍王さまのお言葉です。」

ナレーター　と、小箱を源三に渡しました。大切な品が無事に戻って乙姫様は大喜び「ありがとう」とにっこり笑顔を見せて初と一緒に帰って行きました。乙姫様のあまりの美しさに源三はしばらくうっとりしていましたが、我に帰ると無性に今一度乙姫様に逢いたくなりました。

源三　「乙姫さまあー、乙姫さまあー。」

ナレーター　無我夢中で沖を目指して漕ぎ出しました。だいぶ沖へ進んだころ、みるみる空には真っ黒な雲がわき、激しい風と雨が襲ってきました。小船は木の葉のように波間に浮かんでいます。源三は思わず龍王様から貰ったばかりの玉手箱を抱きしめました。

源三　「龍王さま～、助けてえ～。」

ナレーター　死に物狂いで祈り続けました。どれくらいの時間が経ったのだろうか。ふと我に返ると風雨は収まり波うちぎわへ無事についているではありません

か。まったく夢のような出来事でした。
それからの源三夫婦は玉手箱を神棚に供えて、毎朝漁に出る時は、海上の安全と豊漁を祈るようになりました。
ある時この地方を暴風雨が襲いましたが一心にお願いをしたお陰か、この地区はほとんど被害がありませんでした。
源三の女房は、

源三女房　「神様のような玉手箱じゃあねえかよう、おらがのような漁師んとこへ置いておくのはもってねえから龍王さまへけえしたほうがいいと思うよ。」

源三　「たしかにそうだよな。そのうちあのお初さんに逢える気がしてんでなあー。これからはいつも舟へ持っていくことにしらあ。」

ナレーター　源三の予感どうり、平島の沖でお初に逢えたので玉手箱は龍王に返すことができました。
話は竜宮城へ変わります。乙姫様の宝物を奪ったり、いろいろ悪さをする亀には年老いた親亀がいました。息子の不始末を龍王に謝りました。龍王は

龍王　「よいよい。そなたに頼みがあるのだ。長いことこの竜宮で仕えてくれたが、もう年だからこの辺で陸へ上がる気はないか、と言うよりもそなた夫婦の念願であったであろう。丁度源三という漁師の居るあの海辺が気に入っている。あの親場をわしに代わって守ってもらいたいのだ。」

ナレーター　龍王の頼みは亀にとって願ってもないことでした。
ある日の朝方海辺に大きな亀が二匹息も絶え絶えになって横たわっているのを漁師が見つけました。

漁師1　「亀が陸で死ぬと不漁が続くと親から言われていたんだあよ。なんとか助けなくちゃあ。」

漁師2　「思い出した。亀は酒がでえすきなんだぁ、酒を飲ませりゃ元気になるかもよ。」

漁師1　「いいとこえ気がついてくれた。俺が酒を買ってくるからあとを頼むよ。」

ナレーター　酒をのませると亀は間もなく元気を取り戻しました。

漁師2　「ヤレヤレよかった。もうでえじょうぶだ。さあさあ帰えんな。」

ナレーター　亀は動きません。そこへ源三が駆けつけ、みんなに玉手箱のことを話しました。そして、昨夜龍王様が夢枕に立たれ、自分の代わりに亀の夫婦を遣わす、大事にかわいがって欲しい。海上の安全と豊漁は間違いないとお告げがあったと真剣に話すのでした。

漁師1　「龍王様のお使いだ。」

源三　「大事にしんだあよ。」

ナレーター

漁師と亀はいい関係で暮らしていました。無論豊漁も続いていましたが、ある嵐の夜、漁場を守るかのように二匹とも亡くなってしまいました。漁場では亀をねんごろに祀り、八大龍王という碑を建てて海上の安全と豊漁を祈るようになりました。

今でも漁師にとって八代龍王は大事な海の神様です。

浜降祭の始まり

ナレーター

この祭りは寒川神社を中心に茅ヶ崎と寒川の各神社の合同の祭典で大小四十基位の神輿が暁の砂浜を入り乱れて勇壮に担がれます。

その後、整列し式典に移ります。新鮮な野菜、魚などを供え、鈴木孫七の子孫や地元名士によって玉串が捧げられます。

浜降祭はどんないわれから起こり、いつから始まったものか定かではありません。

天保九年（一八三八）寒川神社の神輿が恒例の国府祭（こうのまつり）に渡御した帰りに、相模川の渡しで寒川の氏子と地元の氏子が争いを起こし、寒川神社の神輿は、折からの増水中の川へ転覆し、そのまま濁流に呑まれて行方不明となってしまいました。寒川神社の氏子たちが色を失ったのは言うまでもありません、神社では早速付近の村々にその捜索を依頼し、発見した者には米三〇〇石の謝礼を出すと付け加えました。

この頃南湖に孫七という地引き網を家業とする漁師がいました。孫七は熱心な信心家で、自宅裏の八雲神社を崇拝していました。

昼間は忙しいので夜参詣するのを常としていました。ある晩、参詣しようと神社に行きますと、中年の女の人がお参りをしていました。

孫七　古鍛冶屋女房

「アレ！おめえさん、鳥井戸の古鍛冶屋のおかみさんじゃあねえか。」

「ハイ！そうだがよ。」

孫七　「やっぱり古鍛冶屋さんだったか。」
古鍛冶屋女房　「マア！孫七さんじゃあねえかよ。」
孫七　「俺なんかお宮のそばだからいいが、鳥井戸からじゃあ大変だ。それにしてもこの頃は、随分熱心に来られんが……、どうかしなさったかね。」
古鍛冶屋女房　「実は……、孫七さんだから話すけんど、内の亭主と来たらもう……、呑んだくれで困っちまあだあね。ちいせい子供が四人もいるってえのに稼えだ金はみいんな呑んじまあだあね。」
孫七　「ほう！あの働きもんの金さんがなあ。」
古鍛冶屋女房　「いくらよく稼ぐからって。自分ばっかしいい思いをして…、家のもんは食うや食わずだあね。ちいっと呑むのを減らしてくれって言うもんなら暴れ出しちゃって、どうにも始末が悪いだよ。」
孫七　「フーン、そりゃあ、金さんいけねえや。」
古鍛冶屋女房　「もう神様におすがりするよりほかねえと思って、八雲神社と御霊神社へお参りしてんだあよ。」
孫七　「おかみさんも大変だなあ。でも神様は、おめえさんの苦労をきっと解って下さると思うから辛抱しなせえよ。」
ナレーター　古鍛冶屋のおかみさんを元気づけて家へ帰った孫七は、金さん一家が可哀想になりました。家のものに相談しますと、孫七のおかみさんはケラケラ笑っています。

孫七女房　「マタ！お前さんのおせっかいやきの病気が出ましたなあ。『面倒見のいい孫七は顔役みてえだ。』なんて世間からおだてられていい気になってさあ。おかげで家じゃあ年中貧乏暮らしだあね。でも悪いことをするんじゃあねえから、よかんべえよ。お前さんの好きにしなせえ。」
ナレーター　似たもの夫婦、孫七のおかみさんも気のいい人でした。
その夜、八雲神社で孫七は古鍛冶屋のおかみさんに言いました。
孫七　「家のもんと相談したら、おかみさんをひと先ず家の網で働くようにしたらって言うんだが。それから金さんにやあ酒を加減するよう話してみるからな。」
古鍛冶屋女房　「ありがとうございます。助かります。」
ナレーター　おかみさんは地引き網で働き、手間賃も特別よくして貰いました。
一方、金さんも孫七の親身な説得で立ち直りました。
昼間は相変わらず漁業で忙しいので、古鍛冶屋一家の報告方々夜になって八雲神社へお参りに行きますと、孫七の耳に神様の厳かな声が聞こえました。
神様　「世のため人のため、そなたはよい行いを続けている。誠に殊勝な心がけである。孫七よ！寒川神社の神輿の、馬入川での災難を存じていることと思う。御神体が明日の朝早く南湖の海岸に漂着される。そなた御神体を保護し、

寒川神社へ知らせるよう。」

ナレーター　ハッと！我に返った孫七は、家へ帰っても寝つかれませんでした。

孫七　「ウーン、ウーン、寒川さんが馬入川へ落ちてからもう半月にもなる。まさか南湖の海に流れ着かれるとは。よし、寝ちゃあいられねえ、無事保護しなくちゃあ。そーだ、金さんに応援を頼むべえ。」

ナレーター　金さんも快く引き受けてくれて、孫七と二人で夜明け前から波打ち際を西に東に歩き回りました。

白々と夜が明け始める頃、孫七の漁場に光り輝く御神体を発見しました。

孫七　「金さーん、居なさった、居なさった。ここに居なさった。」

金　「おー！これは寒川さんの神輿にちげえねえ。はやく引き上げねえと。」

孫七　「何もないで、そこに生えている『はまごう』を敷いて安置される場所を造ってくれ。俺は急いで寒川さんに知らせに行ってくるから。」

金　「ああ、孫七さんが帰ってくるまで、御神体はしっかりお守りしているからな。」

ナレーター　孫七は寒川神社へ走りました。六月三十日の早朝のことでした。

神社側の喜びはひとかたではありませんでしたが、発見者に渡すべき三〇〇石の米を用意するのに手間取って、三日後に御神体は神社に帰りました。

そのお礼のために、それから毎年神輿が孫七漁場へ渡御するようになりました。

その後、各神社に神輿ができるようになり、鶴嶺八幡宮が既に行っていた、六月二十九日の禊ぎとも合同して、明治九年（一八七六）に七月十五日を浜降祭と定めました。孫七漁場は現在はありませんが、当時この漁場はいつも大漁だったと言い伝えられています。また、馬入川で寒川の氏子と争った地元の氏子十六名は、丁髷を切り落とされる刑を受け、その髷は馬入の連光寺に葬られて丁髷塚となって現在も残っています。

尚、浜降祭は、昭和五十三年県の無形文化財に指定されました。

鈴木家は屋号を天孫といい、同家はこの事からお礼参りの渡御に際しては寒川神社の御旅所神主を務めることになりました。例年、神社では渡御に先立って同家へ使者を立て、祭りの準備一切を御願いします。

鈴木家では神輿を安置する位置にしめ飾りをめぐらし、盛り土をして御座所をつくり、供え物を用意します。

鈴木家代々の当主は、古くは風折烏帽子、素袍を用意しましたが、現在は麻の裃に刀を差した服装で式典に臨みます。

また鳥井戸の古鍛冶屋（石黒家）は、御神体を捜すのを手伝ったので寒川神社では謝意を表す印として、毎年帰路には必ず立ち寄ることになっていましたが、今では神輿通過の順番も変わり、石黒家への立ち寄りはなくなってしまいました。かって立ち寄りの際には、石黒家では安倍川餅を売り、それが売り切れる迄は神輿は出立しないとされていました。

別の説には、神輿を担ぐ人達がこれを食べ尽くさないうちは出立しなかったと云われています。

弁慶塚物語

ナレーター　このお話は、平家と源氏が激しく争った鎌倉時代にさかのぼります。

平家が滅び源氏の世となりましたが、今度は源氏が肉親同士の争いとなり、源九郎義経は兄頼朝に追われて、奥州平泉で非業の最後を遂げました。義経の家来武蔵坊弁慶も平泉で殉死しました。

その武蔵坊弁慶が茅ヶ崎と関わりのあった物語です。

その頃、源頼朝は、現在の静岡県伊豆で旗揚げをしました。しかし、ことは順調にゆかず、再三戦いに敗れましたが、漸く鎌倉に、やや安定した勢力を築くことができました。

義経は、富士川の合戦で初めて平家に勝って喜ぶ頼朝と、黄瀬川で対面しました。

それから三年ほどの間に、源氏は平家を滅ぼし再興を果たしました。宇治川の合戦をはじめ、ひよどり越えの奇襲、一ノ谷、屋島、壇ノ浦の合戦とすべて義経の働きの結果でした。

壇ノ浦の合戦以来、世の中は、全く源氏の天下となり、平和が続きました。

ナレーター　ある日のこと、武蔵坊弁慶は義経の使いで鎌倉へまいりました。その途中、鎌倉街道、現在の茅ヶ崎市浜之郷辺りを通りかかりますと、前方の農家から黒い煙が立ち昇りました。同時に村人の慌てふためく、けたたましい声と共にめらめらと火の手が上がりました。「火事だ」弁慶はその場に駆けつけ

村人1　一新兵衛さんが家ん中にいるだぁー。」
村人2　「まごまごしてんと焼け死んじゃぁよう。」
村人3　「新兵衛さんを助けべえとおさよちゃんも家ん中え飛び込んだままだ。」
村人1　「早く助けねえと二人とも焼け死んじゃあよう。」

ナレーター　弁慶は大声で村人に確かめました。

弁慶　「家の中には二人いるのだな！」
村人2　「ここの父っつまと、娘のおさよちゃんが、父っつぁま助けべーと。」
弁慶　「よーし。」

ナレーター　弁慶は傍らの川で、全身を水に浸すや、燃えさかる火の中へ飛び込みました。大男の弁慶ですが、村人があっという間の風のような速さでした。
　間もなく、村人が一斉に歓声を上げました。炎の中から弁慶が二人を小脇に抱えて、飛び出してきたのです。

村人3　「新兵衛さんだ、おさよちゃんだよ、助かったぞー、たすかったぞー。」
村人123　「助かった、助かった。ありがとうございます。ありがとうございます。」

ナレーター　二人を助け出した弁慶の姿は、まるで仁王様のように、神様のように村人には見えました。
　すぐに隣の家に運ばれた新兵衛とおさよの親子は、村人の手厚い介抱で幸い元気を回復しました。
　時が過ぎ、都で重い役職を与えられた義経に、妬み深い頼朝の疑う心が次第に募り、義経主従は一転して、頼朝に追われることになってしまいました。
　奥州の藤原秀衡を頼って、吉野山、安宅の関と、苦難の逃避行が続きましたが、無事に平泉へ着きました。
　しかし頼朝の圧力に屈した藤原秀衡によって、文治五年、衣川の館で義経主従は非業の最期を遂げました。
　あまりに悲惨な出来事は、たちまち地方の隅々にまで伝わりました。
　それから十年近くの年月が過ぎました。
　建久九年十二月二十八日、この日源頼朝の家臣稲毛三郎重成が、亡き妻の供養のために相模川に橋を架け、その落成式が行われました。頼朝は、大勢の家臣を引き連れてこの式に参列しました。
　頼朝が落成式からの帰り路、浜之郷から十間坂にかかる松並木の辺りで、急に異変が起きました。
　大空が真っ黒に曇りはじめ、辺りは夜のように暗くなり、雷鳴が轟き雨が降りだしました。更に、十名ほどの武士が頼朝の頭上高く、中空に浮かび現れました。それは義経の叔父、行家を始め弁慶主従の亡霊でした。

行家　「行家であるぅ。そなたが征夷大将軍の栄誉を得たのはだれのお陰ぞ～～～～義経を始め一丸となってそなたを助けた恩を忘れて、我々を惨殺するとは畜生にも劣る行為ぞ、今こそ地獄の果てに追いやってくれるはー。」

義経　「兄上、義経は無念でござる。梶原景時如きのざん言を信じめさるとは～。」

弁慶　「今こそ、深く天命に服されよー。」

ナレーター　この形相すごい亡霊に頼朝は半狂乱になり、馬が暴れ出しました。二度三度と馬は棒立ちになったからたまりません。頼朝は地面に放り出され気を失ってしまいました。

するといつの間にか雷雨もやみ、元の天気に治まっていました。

頼朝は落馬のとき打ち所が悪く、これが因で翌年正治元年正月に亡くなりました。

後年、浜之郷、鳥井戸の村人たちは、行家、義経主従の霊を慰めるため、鳥井戸の神社に義経を祀りました。現在の御霊神社です。

そして浜之郷と鳥井戸の境のところに弁慶塚を建てて弁慶を祀りました。国道一号線の左富士で有名な鳥井戸橋のきわで、富士山が見える反対側のところ、鶴嶺八幡宮参道入口を入ってすぐ東側です。享保年間の供養塔の残存が今なお残されています。

現在の碑は昭和五十七年に茅ヶ崎郷土会が立派に復元しました。

終わりに鳥井戸地区をご紹介しましょう。

国道一号線鳥井戸橋の南側の周辺で、こぢんまりとした地域で東から南の方にかけて、南湖上、中、下町地区に囲まれ、西は松尾川を境に浜見平団

地です。

今から、八〇年程前には両岸に真菰や葦が茂り、ヨシキリが鳴く松尾川を帆掛け船で、柳島湊から魚や砂利などがこの鳥井戸へ陸揚げされ、ちょっとした港の感じでした。

この鳥井戸地区のトリイの文字は赤い鳥居のトリイではなく、近くにあった大きな水たまり井戸か池か、そこに鳥がたくさん来るので鳥の井戸鳥井という文字で書かれるのだと聞き及んでいます。

もうひとつ、相模川に橋をかけた場所は弁慶塚より西のほうへ六〇〇メートル位行った左側のところにあります。

この橋の橋脚が、当時水田だった現在地の地中から七本、関東大震災の時に出現したのです。平成十三年調査の為池の水を抜いたところ新たに二本現れ、合計九本になりました。

旧相模川橋脚は、大正十五年十月二十日国の史跡に指定されています。

室田の花火

ナレーター　夏の風物詩、花火大会が各地で盛んに行われています。
市内室田では明治の初期から、若衆活動の一環として、手作りの打ち上げ花火、仕掛け花火で、近郷近在の人々を楽しませていました。
ある日、昼から村の寄り合いがお宮でありました。弥五郎は座長に選ばれ、いろいろ込み入った相談事が何とかまとまったころにはもう日もとっぷりと暮れていました。

弥五郎　「ひとまず話はついたけど、ただ一つ、若者は野良仕事に精出すだけじゃなく、今ちっと夢のある活動を考えなくちゃあ。」

ナレーター　今日の寄り合いの結果を思い出しながら、わが家近くまで来ますと、薄闇の中で、奇妙な出来事が目に入りました。
それは、野良道脇の農業用水の中を、ひざまで水に浸かってぶつぶつ独り言を言いながら歩いている者がいます。

旅人・龍三　「ちくしょう、ちくしょう、こんなに遠い筈はねえのに、なかなか着かねえ、藤沢はまだかなぁ。」

弥五郎　「おーい、夜になるってえのに何してんだ。」

ナレーター　それでもまだ、じゃぶじゃぶと水の中を歩いています。

弥五郎　「こりゃあ、ちいっとおかしいぞ。」

ナレーター　急ぎ足でその男に近づきました。振り分け荷を肩にかけた旅の者でした。

旅人・龍三　「藤沢はまだか、藤沢はまだか。」

弥五郎　「おいおい、藤沢はそっちじゃねえ。反対だぁ。」

ナレーター　弥五郎は、男の手を取って野良道へ引き上げました。その顔はぼーとしていて、正常ではありません。

弥五郎　「はぁー、こいつあ、狐に化かされたな。
おい、しっかりしなせえ。◎◎パチッ◎◎」

旅人・龍三　「うっ！」

弥五郎　「おめえさん、狐に化かされていなさったんだ。」

旅人・龍三　「お助けいただいて、ありがとうございました。
あーぁ、こんなぶざまな姿をお目にかけて、相すいません。」

弥五郎　「いやいや、それより早く気がついて良かった。でなかったら、一晩中この用水の中をさまよっていたかもしれねえよ。この辺にや、たちの悪い狐がいる

もんでな、まだ宵のうちだってえのに、悪さをしやがってえ。
それにしても旅をしていられるようだし、陽気がいい時だからって、ずぶ濡れのこの姿じゃあ体に悪い。俺んとこは、じきそこだから、ひと先ず俺んとこへ来なせえ。」

ナレーター　と、言うわけで、この旅人は弥五郎の家へ案内されました。

弥五郎　「おいっ、いまけえったぜ。」

弥五郎女房　「あら、お帰えんなせえ。今日はずいぶん遅くまでかかっちゃったんだね。あらっー、この人は？」

弥五郎　「うん、訳があってな、さあ旅の人、家へ入えんなせえ。」

龍三　「へえ、それではご免くだせえ。」

女房　「まあ、こんなにびしょ濡れで、お前さん、この人はいったいどこの人だよう。」

ナレーター　弥五郎がいきさつを話しましたので、おかみさんも漸く合点がいきました。

女房　「そりゃあまあ、大変でしたなあ。さあさあ、とにかく着替えしなくちゃあ。藤沢へ泊まるつもりだったら今夜は家へ泊まっていきなせえ。」

ナレーター　旅人は、弥五郎夫婦の好意にあまえることになり、自分の素性を話し始めました。

龍三　「わしゃあ、下野の花火師で龍三と言うもんでさぁ。京都で花火の大会があって、その帰り道だったんでさ。いつも帰りには藤沢の宿で泊まることになってるんで、少し暗くなったがもうじき藤沢だからとつい気が緩んだもんで、あーあ、狐につけ込まれちゃってフフフ…
とんだお世話になることになってしめえました。」

女房　「あらっ、花火師さんかね。花火って、とてもきれえなもんだってねえ。」

龍三　「へえ、そりゃあどこの花火大会でも大勢の人が見物に集まって、賑やかなもんでさぁ。」

ナレーター　その晩、花火の話に心打たれた弥五郎は、なかなか寝つかれませんでした。

弥五郎　「花火を村の若衆の活動に取り入れたらどうだろう。しかし、覚えんにゃぁ大変だろうなぁ。でも若衆の活動としてやり甲斐があるんじゃあなかろうか。」

ナレーター　あれこれ考えた末、遂に決心がつきました。
夜が明け、花火師はお礼の言葉を繰り返しながら旅立ちの支度を始めました。弥五郎は思いきって頼みました。

弥五郎　「龍三さん、折り入ってお願えがあるんですが。」

龍三　「はぁ？何でしょう。」

弥五郎　「厚かましい頼みなんですが、花火のやり方を、村のもんに教えてもらえねえだろうか。」

龍三　「へえ、そりゃあ、お世話になったことですんでえ、まっ、いいでしょう。だがぁ、そう簡単なことじゃぁありませんでえ。でえいち、危険がともなうしなあ。」

弥五郎　「並たいてえでねえ事は、大体察しがつきますが。どうか一つ、おねげえします。」

ナレーター　弥五郎の熱意に龍三は快く承知してくれましたので、若衆を中心に、村人と相談しました。いろいろ意見も出ましたが、花火を伝授してもらうことに村中が一致しました。龍三は丁度仕事も一段落したところなので、しばらく弥五郎の家に逗留して花火の技術を伝えることになりました。

先ず「烟火秘術方」が書かれている帳面を元にして、勉強を進めました。若衆たちは、大変な苦労を重ね、遂に、その技術を会得しました。

そして、その腕前を、今の松林中学校脇の広場で披露することになりました。近郷近在から、大勢の人々が見物に集まりました。

村人3　「今晩は！たのしみだなぁー。色々な名前の花火があがるんだとよー。」

村人1　「うわーっ、花火が上がった！」

村人2　「こりゃぁすげぇや！天まで届きそうだ！」

村人3　「わぁー、綺麗！」

村人1　「今のは、雨傘のロクロ型だとよう！」

村人2　「今度ぁ、花魁道中だとよう！」

村人1　「うわぁー、すげ～や～。」

村人2　「きれいだなァ～。」

村人3　「うわっ！風船の打ち上げだぁ！」

村人2　「すげぇーやー。」

村人1　「やったぁー、今度ぁー人形の打ち上げだぁー。」

全村人　「きれえだー。すげえやー。」

村人2　「もう終わりだとよー。」

女房　「お前さん、本当によかったねぇ～。」

弥五郎　「長生きはしんもんだなぁ～。」

ナレーター　その結果は大成功でした。その後、毎年夏になりますと、この大会は盛大に続けられ、たくさんの人々を楽しませました。

特に日露戦争凱旋の祝賀大会には、いろいろ趣向をこらして行われました。花火に使用した木の丸い筒は、竹のタガで締められ、高さ二メートル、直径四〇センチの大きさで、現在、文化資料館の一階展示室に、使い方の説明文とともに、大切に保存されています。ほかにも、この花火を伝えたのは、茅ケ崎海岸にあった鉄砲場にいた火薬作りの人が、宝田の村人に伝えたのが始まりという説もあります。なお弥五郎という人は、宝田一丁目の島崎英明さんのご先祖です。

室田という地区は、北は大山街道を境に、上赤羽根、東から西にかけて松林、本村、高田に囲まれています。

室田の名が歴史的資料に初めて登場するのは、室町時代中頃の文書からです。

明治十年頃の記録によれば、一面に広がる田畑はよく肥え、作物の実りが良く、又戸数は二十九戸とあります。今では、室田小学校、松林中学校、近くには茅ヶ崎高校、市立病院が出来、すっかり住宅街となりました。

女護が石

ナレーター　女性の病気、怪我、または悩みごとなどを癒してくれる不思議な石。浜之郷鶴嶺八幡宮境内の前にある「女護が石」。

ナレーター　昔、むかーし、浜之郷に口喧嘩の絶えない様の佐太郎、おたみという夫婦がおりました。働としての腕のいい佐太郎ですが、大酒飲みが玉にきず。おかみさんのおたみは体が弱くて年中ぶらぶらしています。

佐太郎　「チエッ！、また寝てるのか！よくまあそんな悪いとこばっかりできんもんだなぁ。」

おたみ　「またお前さん飲んでるね。ちったぁ、あたしの身にもなっておくれよ。好きで病気になったんじゃねえよ。めーんち、めーんち、酒ばっかり飲んで！」

佐太郎　「なんだと！つべこべうるせえ！病人はだまってろ。」

おたみ　「アー、くやしい。」

佐太郎　「悔しかったら別れてもいいんだぜ、この家を出ていってもいいんだぜ。」

おたみ　「オヤ！　いいなすったね。じゃあ今っから、暇をもらって実家へ帰ります。」

佐太郎　「オー、いいともヨ。荷物をまとめてさっさと出ていけ！」

ナレーター　頭にきたおたみは、取り合えず自分の物をまとめ、両手に下げて表口から出ようとしました。すると佐太郎は表口のところへ突っ立ち、両腕を広げて

おたみの前へ立ちはだかりました。

おたみ　「これじゃあ、あたしは出られねえじゃねえのかよ。」

ナレーター　おたみは仕方なく、裏の勝手口から出ようとしますと、佐太郎、今度は勝手口へ素早く回って矢張り両腕を広げて立ちはだかりました。

おたみ　「表も裏も、こうふさがれちゃあ、家から出られねえじゃめえかよ。」

佐太郎　「出ることができなきゃあ、家の中にいりゃあいいじゃねえかよ。」

ナレーター　「夫婦喧嘩は犬も食わない。」とは、昔の人はよく言ったものです。まったくその通りで、明けても暮れても喧嘩の絶えない二人でも、似合いの夫婦でした。

子供の無いこともあってか、近所の子供を、とても可愛がりますので子供たちにはなつかれ、また、年寄りや体の不自由な人の面倒もよくみました。

そして、毎日近くの神社に、かかさずお参りに出かけました。

おたみ　「八幡さま、どうか丈夫な体になりますように。うちの人がお酒を飲みすぎねえように。あぶねえ仕事なんで、怪我なんかしねえように、どうかお願げえします。」

村人1　「おたみさんは、信心深けえなあー。毎日お願えしたら、その内良い事があ

るよー。」

おたみ　「ありがとうごぜえます。」

ナレーター　仕事の帰りには佐太郎も必ず、八幡様へお参りをしました。

佐太郎　「八幡さま、どうか女房を丈夫にしてやってくだせえ。」

村人1　「佐太郎さんもお参りか、おたみさんも昼間お参りしていなさったよ。あんたら夫婦は感心だなー。」

佐太郎　「おたみが可哀相でよ。」

ナレーター　ある日のこと、佐太郎はいつものように八幡さまへお参りを済ませて参道へ出ますと、クラッと立ちくらみがしました。腰掛けるところを捜しますと、手頃の石が目に入りました。

佐太郎　「やれやれ。ドクコイショと。アッツチチチッ！うわっ！アチイ。」

ナレーター　佐太郎は、腰を降ろした途端にお尻に手を当てて飛び上がりました。この石の熱いこと、お尻がやけどをしたのではないかとそっと手を当ててみました。何ともありません。恐る恐る石を触ってみますと、全然熱くありません。

佐太郎　「変だなぁー、何ともねえ。」

ナレーター　静かに手を石に当てていると、心地よい温もりが、腕から全身へと伝わってきました。

佐太郎　「こりゃあ、不思議な石だ。」

ナレーター　思わずこの石に抱きついてしまいました。それからというもの、佐太郎は仕事の帰り八幡さまにお願いしたあと、この石を両手でつるつるさするようになりました。石の温みで仕事の疲れがほぐされるような気になるのです。

そして、このことをおたみに話しました。

おたみ　「そんな事言って、今までそんな噂ひとつ聞いたことねえもんよ。」

佐太郎　「じゃあ、だまされたと思って、おたみも試してみろよ。」

ナレーター　半信半疑な気持ちで、おたみもその石を試してみて驚きました。

おたみ　「アレー、ほんとだぁ。なんてまぁ、気持ちの良いあったかさだよ。」

村人2　「おたみさん、何をしていなさる。」

おたみ　「この石をつるつるさすると、石の温みでいい気持ちになりますよ。疲れが取れるだよ。」

村人2　「本当かね？おー、こりゃ温いね。いい気持ちだぁね。」

ナレーター　り話をしたりして集まっています。

佐太郎、おたみ夫婦は、八幡さまと同じ御願いをこの石にもするようになりました。熱心にお願いをしたからでしょうか、おたみはすっかり丈夫になり、夫婦喧嘩もなくなりました。その上、おたみに赤ちゃんが授かりました。佐太郎の喜びは天にも昇るようでした。呑んべえと言われた酒もほどほどになり、今まで以上に働き者になりました。

やがておたみは産み月となりました。

産気ずきましたが、もともと体が弱かったせいか、大変な苦しみようです。佐太郎は気が気ではありません。佐太郎は、八幡さまの前の石をめざして走りました。そして、両方の手の皮がむける程石をさすりながら、

佐太郎　「どうか、おたみの安産をお願えします、お願えします。」

ナレーター　一心に祈りました。

しばらくすると、元気な産声が佐太郎の耳に入ったような気がしました。心を弾ませながら家へ走り帰りました

佐太郎　「やったぁー、やったぁー、やったぞー。」

村人1　「佐太郎さん、おやじになったらしいよ。」

村人2　「あんたに喜んでよかったなぁー。」

ナレーター　赤子の元気な泣き声と共に、おたみの笑顔が目に入りました。

佐太郎　「おたみ、ありがとうよ。」

ナレーター　佐太郎は、顔をくしゃくしゃにして喜びました。
この話は、忽ちそれからそれへと広まり、女性がこの石にお参りするようになりました。そしていつしか女性を護る石、女護が石と崇められるようになりました。
女性が願いを込めて、両手でさすった跡が大きくへこんでいるのが印象的です。今でも時折お参りする人の姿を見かけることがあり、大切に保存されています。

女護が石のある所の真新しい案内板には、
「女性の守護神として信仰されていた石神です。
体の悪いところを、願い事のある体の部分に
『祓え給え　清め給え』と、三回心に念じながら石をなでて、
からだの部分もなでる。」と、あります。

和合の稲荷様

ナレーター　昔むかし、中島村に、又兵衛という百姓がおりました。又兵衛は信仰の篤い人で、村の鎮守、日枝神社と八坂神社に村の安全を、右近・左近の稲荷様には田畑が豊に実りますようにと毎日参詣を怠りませんでした。
ある年のこと連日の大雨で相模川が氾濫、村は大洪水となり田畑や人家は無残な被害を受けました。特に村人が驚いたのは、左近稲荷が社ごと流されてしまったことです。村人は田畑や住まいの復興に追われながらも懸命に稲荷様を捜しましたが、どうしても行方がわかりません。

村人1　「まさか海に流されちまったんじゃねえだろうな。」
村人2　「お宮と違って稲荷様はきゃしゃな社だったからなあ。」
村人3　「海に流されたとしたら、こりゃあ、えれえことだ。」
又兵衛　「なんとか無事を祈るしかねえなあ。」

ナレーター　村人は殆どあきらめかけていましたが、又兵衛は探し続けていました。
ある夜のこと、又兵衛はこんな夢を見ました。左近稲荷様がしきりと又兵衛に呼びかけるのでした。

左近稲荷　「もし、又兵衛よ、私は中島へ帰りたい。あの洪水で流されてしまって今、柳島の河岸にいる。葦の中でどうにもならない。早く中島へ帰りたい。」

ナレーター　ハッ！と目を覚ました又兵衛は、夜の明けるのももどかしく、村の人達に集まってもらい夢のことを話しました。

又兵衛　「ゆんべ、左近様が枕元に来て、『中島へ帰りたい、早く中島へ帰りたい。』と、幾度も言われたんだあよ。」

村人1　「そんなふうに言われても。」

村人2　「みんなで探してもみつからねえじゃねえかよ。」

村人3　「どこに居なさるだ。」

又兵衛　「左近様が言いなさるには、柳島の河岸の葦の中でどうにもならないとよ。」

村人1　「良かった、良かった、とにかく無事だったんだ。」

村人2　「まあまあ、それにしてもずいぶん苦しい思いをしていられたんだろう。」

村人3　「早く探して、元のところへお連れしなくちゃあ。」

ナレーター　元気づいた村人は河岸へ向かいました。ところが、この辺りは見渡すかぎり背丈ほどもある葦が生い茂っているので、左近稲荷様を探すことは容易ではありません。村人の中には弱音を吐くものが出始めました。

村人1　「こりゃあ、えらえこった。」

村人2　「ちょっくらちょっとにゃいかねえぜ。」

村人3　「左近稲荷様、ホラ、おめえたちも探せよ。左近稲荷様。」

全員　「左近稲荷様〜〜。」

ナレーター　とうとう悲鳴のような大声を上げてしまいました。すると不思議、なんと、稲荷様の声が返ってきたようでした。

左近稲荷　「私はここにいる。皆が居るすぐそばじゃ。ここだ、ここだ。」

ナレーター　元気を取り戻した村人は、一斉に近くを探し始めました。そして葦に絡まれ、泥まみれになっている左近稲荷様を発見しました。洗い清められた左近稲荷様は元のところへ安置されました。その後村人は相談しました。

村人1　「左近様と右近様と別のところにおくと、また洪水にあった時、どっちかが流されて可愛そうだよ。」

村人2　「それじゃあ、一つの社にしたらどうだろう。」

村人3　「二つ並べてまつるのもいいじゃねえか。」

又兵衛　「そうだ、そりゃあ、いい考えだ。そうしよう。」

ナレーター　村人達は、早速社作りを始めました。四、五日もすると立派で可愛い社が出来上がりました。

又兵衛　「おお、こりゃあいい社ができたなあ。」

村人1　「早速、お移りいただくべーよー。」

村人2　「ご馳走作って食べていただこう。お腹も空かれただろうよ。」

ナレーター　ストッコを作って、赤飯や油揚げを供えました。
右近稲荷、左近稲荷は一つの社に仲良くまつられ、村人は和合の稲荷様というようになりました。
国道一号線を平塚のほうへ行きますと、中島の信号があります。それを左折して殿道に入りますと、五十メートルくらいの右側にまつられています。
それまでは、低い土地にあった稲荷様が、今は高い土地に移されたので、洪水が出ても流されることはなく村人を見守っていられます。

あとがき

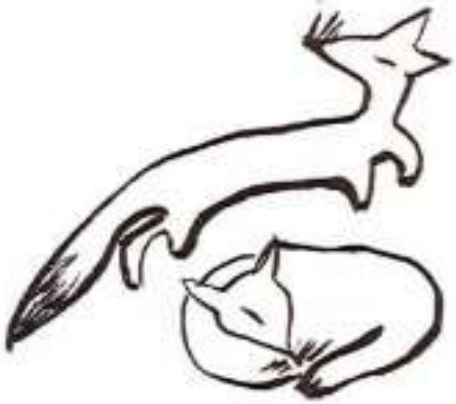
此の度、茅ヶ崎市より『げんき基金』（助成事業）を頂き「茅ヶ崎の民話」の台本を二十五話「茅ヶ崎の民話劇第一集」として小冊子にまとめました。
お話を聞かせて下さった多くの方々、発行にあたって、ご指導ご助言いただいた方々に厚くお礼申し上げます。
これを機会に地域の皆さん、学校の生徒さん、色々のサークルの方々が演じて下されば嬉しく思います。そしてご一報下されば喜んで馳せ参じます。感想などお聞かせ下さいましたら、二重の嬉びでご座居ます。

平成十九年十月

茅ヶ崎民話の会

参考資料

茅ヶ崎市史　3・4・5
資料館叢書　4　茅ヶ崎歴史見てある記　山口金次調査録
〃　6　茅ヶ崎の伝説
〃　10　茅ヶ崎の記念碑　塩原富男
〃　11　南湖郷土
萩園のうつりかわり　萩園郷土史勉強会
柳島のうつりかわり　柳島自治会・五三会
茅ヶ崎の昔話　高橋昭和著
茅ヶ崎の民話　〃
郷土をみつめて　臼井孝之



調査・編集
茅ヶ崎民話の会員
石黒紘美
市川澄子
大塚早知子
紙屋武子
江目とみ子
笹野美佐子
関屋美根子
高橋裕子
花村ひで
古庄杏子
日野洋子
宮治千恵子
米山道子
渡部ミチ子
三橋麗子
〈故〉小野間正
題字　日野洋子

茅ヶ崎の民話劇第一集
平成十九年十月発行
編集　茅ヶ崎民話の会
発行　代表　高橋裕子
電話〇四六七-八二-〇〇五八
ワープロ　林　忠久
印刷　ウメザワ商事
印刷部